



Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or calligraphic text, on a rectangular piece of aged paper affixed to the top left of the book cover.

^ 5
6539



八五
6539

陽雲書庫

陽雲書庫

Handwritten text in cursive script, including the characters 又 抄 田.

Red square seal impression in the top left corner.

010186021849



又吉田

年二方ちつりかきく鹿嶋人子
 まのりかきそ風流にまや不問
 とまのりこ吉田の連記此道に
 石まきこまきうれまきうまこい
 ちまきうらうらまきうれまきう
 たまき紙衣のあまきうれまき

葛玉

羽海

養世のあまきうれまきうれまき
 られまきうれまきうれまき
 月のあまきうれまきうれまき
 つまらぬ菊よほまきうれまき
 おのつらぬ水の匂ひまきうれまき
 おのつらぬ水の匂ひまきうれまき
 今朝まきうれまきうれまき
 麦のまきうれまきうれまき

大松

蓬宇

海

玉

宇

松

玉

海

あつねの根の形を似て
葉の形を似てよき天守こ
法橋をうめし誅の花を
伐し根の根りし芽をかく
人足の跡人付しえまはれや
泣きとれを石におまを
馬持八月の庭の輝近し
おやしと長福の波

萩 宇 洲 玉 萩 宇 洲 玉 萩

種もよ切の根の形を似て
葉の形を似てよき天守こ
法橋をうめし誅の花を
伐し根の根りし芽をかく
人足の跡人付しえまはれや
泣きとれを石におまを
馬持八月の庭の輝近し
おやしと長福の波

萩 宇 洲 玉 萩 宇 洲 玉 萩

神柱の世話を省かたを二出逆て
 くるりの多き社家の振舞
 侍者もまた次者も退くま
 けり松の目もまてて威
 泣く子を六連ぬくと肩車
 としとぬぬ溝の辰物
 壁ぬりの掃くて辰の口も
 おもくたのり雨をまのり

菘 宇 松 宇 玉 洒 宇 菘 海

命あれ仔細古と花の心も
 たのしきゆをうまへるま

菘 宇

おぢやうまを漫吟

秋もまや葉つ葉山子れ
 後く口初りおり掃ふ

蓬 宇 菘 玉

あつり酒の醪入、きくしん
中とあつりとよ、けしきし
きりし記つちりりなる梅文
神初をきしとよとあつり
のたまひきしそのをきし後とあつり
ころろの種き旅の起り
ありとあつり三つとあつり
降つくとあつり

杜 堂
大 菘
五 宇 堂 菘 宇 五

板橋のきくしん
横りかゆり木浜一匹
月の秋縁女房の若きき
生美園下り中垣わり
瑞穂とあつり
大まけ挿の出来あつり
花のつとあつり
涅槃道とあつり

五 宇 堂 菘 宇 五

河をさうり道なり 蓬を友なり
五

七ののりれを碑てよい没
五

墨淡をいつとや品まひし
五

みまにうらうら前季遊よ
五

二親のまねもあふ草の上
五

山のうらま城降りうら雨
五

念力のまぬの水の汲と
五

おはの宿りし書と
五

おまのいせとつよとさへ
五

や約中の員濃を
五

とくくしてゆかた
五

わらひ身を呼よ
五

第とこの屋の内
五

清なりし世の魚
五

大なるみ場取
五

おまをこし
五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

咲司の花子成にまさをたのむ
そよりとよみおをいふなりまのほ

六

菘 堂

西子帰杖の侍受り

中に出しては清くくし雲の
衣はくろくく曲のきり

まろ権

永年

あま梅活のまをよ木より
物とよみははたり
と北岸(よまをいおなり)永月
何事これ申しききき
浅敷を扱かりははた
問答中しきき
やうある娘を今よやう
不と記燈成しきき

五休

旌 休 年 旌 休 年 旌

橋のふらふらと響きしめ
 沈走のうらうらと響きしめ
 かみねをききしめ年々
 秋のうらうらと響きしめ
 寒風の思ふとありあり
 研てよみのうらうらと響きしめ
 漁の裸のうらうらと響きしめ
 さしとて響きしめ

休 年 旌 休 年 旌 休 年

雪のふらふらと響きしめ
 秋のうらうらと響きしめ
 新雪のうらうらと響きしめ
 借し襦をてし響きしめ
 古布のうらうらと響きしめ
 梅のうらうらと響きしめ
 雪のうらうらと響きしめ
 雪のうらうらと響きしめ

休 旌 年 休 旌 年 休 旌

築部つり大店向のまき

ハ

第埴りの丸てし舞下こま

まじしとして活構れ月ま

引板のまきくんと水まきり

漸まきとまぬ斗の懸射り

筋まのまきとまぬ魚四五枚

度倉と木垣へつてまきまき

眼まのまきつり朝露つて花

年

旌

休

年

旌

休

年

旌

道まきまのまきつり花のま

おろの風まき初倉よれ

休

年

瓢箪竹鹿の掬のまきつり

担荷のまき係係係其のまきつり

掬りまき山雪まきつり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

了記しきき武江の草庵に傳ふるを

九

善く神の舞をよき世の内に

若光の御子やまてし世の尾

大衆

火神を中しし語る旅に被

葛玉

夢をよきやれ旅をよし伸まき

五休

下りおれまじりしおれぬ所

永年

おれまじりしおれぬ所

きき

龍の勢をよきとよく

桃仙

蒼より舞の菊のよきとよく

思永

碑のよきとよく使者のよきとよく

巴山

恨をよきとよく江のよきとよく

耐葉

二階の板屋の初縁のよきとよく

必笑

滔漉の重くよきとよく

魯重

世の中よきとよく人の唄

初月

右一順 十月廿廿興り

これより後

十

東京

降雨の最中	百合の	いよき	りり
福来や	青い	ま	あさ
海吉の家	の	徳	と
耳の	海	よ	ま
釣竿	ま	ま	う
ま	ま	ま	ま

あ	う	あ	て	肩	持	り	り	と	初	の	秋	等	載
十	六	ね	ま	内	儀	ま	ま	ま	月	は	蘇	見	外
東	ま	ま	ま	の	ま	あ	ま	見	う	れ		五	休
あ	ら	ま	つ	の	里	遠	ま	ま	の	秋		永	年
八	梅	咲	や	数	ま	の	つ	ま	中	啼		仙	月
茅	の	葉	の	ま	海	や	海	ま	ま	ま		狂	平
ま	ぬ	花	や	珠	を	拍	子	の	ま	ま		序	流
雞	の	新	ま	あ	う	ま	ま	ま	ま	ま		所	月

似花を似葉とあはれまじり	酒麴
波りうく多れぬ中畑をいふ	子紹
蜀帝の影まをて交るをとりうか	奇水
花一本森の入口をまより	三陸
田より休むれをうらふあま	采芥
旅人の出入る路は江戸の春	美哉
初花やまゝ山人にぬゆ	歎壺
おとらぬ山や小春の日は清く	小雲

也しくと秋の暮まじり二日の月	甘栗
朝起のよきを持てしうり花	三水
八月はまじりく司あせり	白元
下前や糸を拂ふ杖の塵	香城
檀子此所まをともる松花うか	乙秀
煙より種を吹く柳一斗	花外
夢をわね根をともおとすり	痴心
取根の蒼海つる身は濁海に	香以

雲霞や竹の葉の荒さなり

成伍

手とりとるを花の筒の百合

未和

聖一水のあそびをめでたき花

對陪

新苔麦や咲かせるを佛の口

魯堂

千草のうらやまを寝てを人引

必榮

花車よ一夜のりて庭の花

把黃

山菜花やよきまはるにほひなり

いち女

二月よりしつと花を秋のそと

あつ女

懶し風松山憐しく山あひり

新勢

水まきを秋くさまのこゝろ

弘美

かゝりしとまの取入の末社福

宇山

人の業はまきと憐るまはれり

芳泉

水は静かに月をさやかとたけり

樹葉

あふりし物と喉ある程なり

未旭

手と赤紫の葉をたきまひ

石皮

襟まの花はつるふきり

巴山

啼く程より啼く處より華木に	五雀
雲の浮く程より雲の川	悟林
半の程のふも憐れなる雨の	只喜
さす程の程ふさしく旅塵集	林南
ふ乙女のさへもさす程程に	指雨
君さすや近とさす程程に	波外
程程や大さく好節の竹の皮	東休
歌さすは花柄の通さるる葉の家	

着飾りよ余さる程に程に	文界
濡さすやさす程程に	子位
のりよ程程に雨のさす程に	未曉
十里程と程程にさす程の旅	桃仙
梅さすやさす程程にさす程	如白
研中さすやさす程程にさす程	栽松
種さすはさす程程にさす程	是三
乃のさすはさす程程に雨一枚	永楳

床をさぐりては水やねね魚 芽竹

窓先の雪のやうさうしうか 佳節

東海より旅へくる

菊もさきと對して

弟との景と、いづれも雨を 氷壺

因附 近郊

菜の花や麦や林檎の歌りも 丑渡

種蒔て水のつりまわれりも 完結

住まふ家とありて打とつ葉烟 号之

一葉のつりておぼやけ旅衣 算史

梅もさや大百姓の歌のまゝ人 素道

夜はさきとてさきとてついでとて 西山

年長にさきとて旅衣をさきとて 聖井

福妻や豆の煮ては今日とて 卜僊

満福りて押つておぼやけの歌 清如

海草もさきとては是とては 文程

あし原の虫ぬや 孫まのぬゆ 赤一
葉をひらき 花をぬき 櫻柿ホ 初月

相摸

初聲や 松魚まゝ 人こゝろ 由岐権
生垣の葉 枝よ 伸し 花本極 琢邑
あまのふと 音 蒲 枝よ 風 葉 卓種
朝ふれ 夢 光のまゝ 夕々 草巴

洋豆

通り 二 尺 虫 云 云 花 室 の 井 連水
花 葉 二 尺 一 風 葉 虫 虫 虫 虫 士敬

駿河

霞 葉 虫 虫 の の き ち つ ち 福 穂 ホ 大糸
花 葉 二 尺 一 花 葉 虫 虫 虫 虫 身身
江戸 物 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 糸
二 尺 一 尺 一 尺 一 尺 一 尺 一 尺 一 尺 一 糸
と 初 聲 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 糸

夢を身や為思ふもなればは春のよ 九味
清のよつらふのよありそこの清 清原

遠江

たのむや啼き心しくと秋の襟 養山
秋立や尾のあやめを落しまう 杜水
影の南なりし柳のきりりか 融雨
人頼のふんまきしきりしやと送り 笠露
小清原の横川をみる程うれ 清原

三河

水のたれた里過しはやなをききぬ 遠宇
うしろをておきしはうど稲穂 尾崎
あまればあふきりるをききぬ 秋友
懸啼てのうろ百れありそおの里 一爰
川に舟を置きあしてゆく村司が 言之
秋の月をいそいでゆく月の日 守仙
葉をまきと降るおの村の時日 杜水

秋まよひの夜もやまゝ星の露 可志

念入てふまゝの多し 土用干 朱碧

植の葉のひく濁や 秋の風 柳坡

露ありまゝのまゝや 山の月 竹淮

山采の骨あつたまゝを 冬の月 素陽

熱田神お

花をより種まふ 雨の本の骨は 熱交

おろりやまゝ 接ぎ種まゝ 葛玉

大瓶の南見よ 秋をわのり

まはりの時 西東 羽所

伴勢

疎りし力おのまゝ 入るや 雲の勢 只青

わらまの啼や 坂あり 所のち 病法

伴賀

宿のまゝ 持て 持ちや 角カ取 去山

余の物もまゝ ひとまゝ 花の巾 逸史

近江

朽しき竹の癖のしるへ成
乙也

年和や素足之まゝのせひ情
培芽

衣はきそこの脚は岩の依
吳嶽

磨きふくしを滴りし尾の香
禎洞

大坂

地りおろし雲の啼りや流のり
昇左

云啼や掃掃きふひの恒癖
祿兄

志はしき法水とてうらなはる
素庵

蕨の勢もたれを風もたれを
宇下

荻葉の葉のや枝や掃り花
似禿

竹の子やおもひも一能く走
眉糸

川秋や荒川のまぢり石の却と
菊也

初秋とおもひの癖はこゝろ丸
南歌

枯もくも枯はさわりし壁の香
杜鵑

松をさあぬ藤のまふ浦の香なり
松癖

横巻の月や 砂きよきうらるる 号宿
賣り起まつる常宿や 湖の 湖水

京

竹の葉や 烟たると二三本 芥金
添れぬと 埃の波の 深旅
出たてを二木と 兼ぬまの 指旅
雪の静も ちりぬ 紅川 拾山

咲き消さく

水鏡ふ夏はくはて 帯日一 息徳
名月や ちりまうらうら 世のそら 文海
志りしと ちりまうらうら 卓志
年のまこと 時や 標 雲歌
まはれし 飛ぶや 聖の 陸の 静 對文
果の 采まうらうら 向ふ 蒼山
干やうら 山采花の ちり 蓮の 采女
解引く 正月を ちり 采女 采女

山崎より東山寺のころの	漁藤
のりま、あやうく消し桐子の	梅因
りう解てよれた敷きと月と梅	禪去
炭煮のまやあつた静良	良大
垣外まきやどつとと春の水	九起
酒と舟まきの淋れたるれ蘇	赤甫
数寄をのたまきまよやちをの	松化

沼橋新まのりて富士川の

水勢の中をよきあつたを

水勢の中をよきあつたを 大森

三日目をあつた佐屋のりり舟 葛玉

静しきまのりて杖をさむし

心まのりては海をりり

草鞋を解きまのり

目わすいぢりし此名に東山

旅寐の面を成すれ帰舟

よりのそとる人こそ謝尺

とすらうとてお根をたれ此村国ナ

好山水を遠くも見るゆゑ母人
物を追くとも逢うらむらね何故を
山の静けさ人物の動くら
ゆきあわらむらむらの旅宿を風華
雪月をみゆしあつて心身ともに息卒
あわらむ山水のせやうなる纏り勝地を
経るれも老人物のあつてあつてあつて
勝會を得るらうあつてあつてあつて
文書をとるべきは知己の所も馬を

大非居藏持

九四

[Faint handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side]



明治元
1868

